

スポット ニュース

掘削設備の搬入、始まる

瑞浪超深地層研究所の主立坑（内径 6.5 ㍍）と換気立坑（内径 4.5 ㍍）では 50 ㍍より深い場所を掘るための掘削設備（スカフォードという）を組み立て立坑の中へ搬入する作業を行っています。このスカフォードは立坑内の作業員を落下物から守るヘルメットの役目もしています。

今後はスカフォードの組み立て搬入を引き続き行うとともに、やぐら（掘削タワー）の設置などを進めていきます。また、やぐらを用いた掘削の再開は来年 2 月頃を予定しております。研究の進捗により 17 年度になる場合があります。



主立坑への搬入の様子



換気立坑への搬入の様子

今月の主な作業内容

【瑞浪超深地層研究所】（10月19日現在）

- 2本の深いボーリング孔で振動を用いて地下を調べる研究（MIZ-1、DH-2）
- 深いボーリング孔で振動を用いて地下を調べる研究（MIZ-1号孔）
- やぐら設備等の地上設備の組立・設置作業
- 浅い4本のボーリング孔（MSB-1,2,3,4号孔）での水圧などの長期観測
- 狭間川における流量観測および用地周辺井戸での水位観測

【正馬様用地】

- 既存のボーリング孔での水圧などの長期観測

地層研ニュースに関するご質問のある方、また瑞浪超深地層研究所や正馬様用地の見学をご希望される方は、下記までご連絡ください。

フリーダイヤル：0120-333-112 東濃地科学センター 地域交流課（青木、松浦、福島）

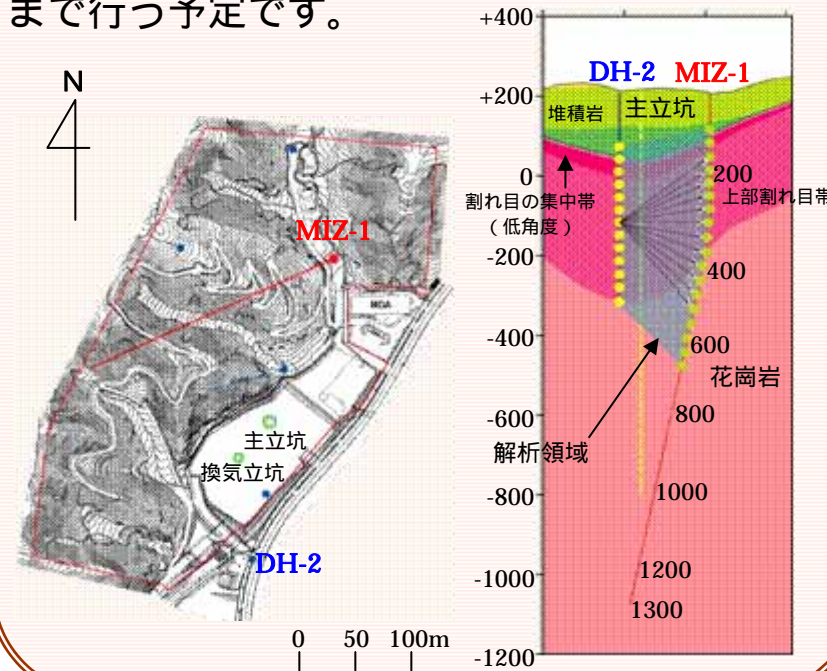
【東濃地科学センターホームページ <http://www.jnc.go.jp/ztounou/index.htm>】

2本の深いボーリング孔で 振動を用いて地下を調べる研究

瑞浪超深地層研究所では、振動を利用して地下の状況や構造などを調べる研究を行います。

この研究は、2本のボーリングの孔（MIZ-1, DH-2）を利用して行います。まず、MIZ-1のボーリングの孔に振動をとらえる測定器を並べます。そしてDH-2の孔で振動を起して測定を行います。

なお、この研究は10月中頃から11月中頃まで行う予定です。



超深地層研究所 跡利用検討委員会 を開催しました

9月27日、瑞浪市陶磁器会館にて第4回の委員会を開催しました。この委員会は岐阜県、瑞浪市、土岐市及び両市の議会代表、学識経験者、地域の代表、サイクル機構の役職員などで構成されています。

今回の委員会では、サイクル機構より超深地層研究所計画の状況の説明や体験学習の場としての施設の活用方策について提案を行いました。また、委員会の皆様には瑞浪超深地層研究所のご視察をしていただきました。



用地内のご視察の様子

来月の主な作業予定(11月)

【瑞浪超深地層研究所】

- 2本の深いボーリング孔で振動を用いて地下を調べる研究（MIZ-1、DH-2）
- 深いボーリング孔で振動を用いて地下を調べる研究（MIZ-1号孔）
- やぐら設備等の地上設備の組立・設置作業
- 浅い4本のボーリング孔（MSB-1,2,3,4号孔）での水圧などの長期観測
- 狭間川における流量観測および用地周辺井戸での水位観測
- 地表の傾斜量を測る装置の設置作業

【正馬様用地】

- 既存のボーリング孔での水圧などの長期観測

第4回超深地層研究所跡利用検討委員会を開催しました

平成16年10月
核燃料サイクル開発機構
東濃地科学センター

平成16年9月27日(月) 瑞浪市陶磁器会館において、第4回超深地層研究所跡利用検討委員会を開催しました(瑞浪超深地層研究所の視察を含む)。この委員会は、岐阜県、瑞浪市、土岐市および両市の議会代表、学識経験者、地域の代表、サイクル機構の役職員などで構成されており、超深地層研究所における地層科学研究が終了した後の施設の跡利用について検討する委員会です。平成8年に第1回を開催し今回で4回目の開催となります。

昨年開催した前回の委員会において、超深地層研究所のうち瑞浪超深地層研究所(以下、研究所)の当面の施設の活用方策について、事務局(サイクル機構)にて案を作成して委員会の場で審議していただくこととなりました。これを受けて、当面の施設活用方策として、体験学習の場としての施設の活用を進めるにあたっての視点や今後の進め方などを事務局にて取りまとめ、今回の委員会に提案いたしました。委員会における検討の結果、提案内容についてのご了承をいただくとともに貴重なご意見をいただきました。

体験学習の場としての施設活用について

施設活用を進めるにあたっての視点

周辺施設との連携

- ・研究所と周辺施設とが密接に連携し、インターガーデン全体が有機的に機能するような活用方策とすることが必要。

中長期的な検討

- ・跡利用につなげるためにも、長期的に何ができるのか、それにつなげるためには短～中期的に何が必要になるのかという視点が必要。

活かした素材の活用

- ・模擬した物ではなく実物を見せる(リアルで迫力のあるものを見せる)。
- ・陳列型の展示ではなく、体験型とする工夫が必要。
- ・児童・生徒に参加させ、アイデアをリアルタイムに体現させる場が理想的。
- ・時間的/空間的広がりを考慮した展示が必要。

積極的かつ迅速な情報提供

- ・超深地層研究所計画に関する情報を積極的に提供するだけでなく、原子力全般に関する情報普及も併せて行うことも必要。

他分野の研究などでの利用

- ・深度約1,000mの坑道は地層に関する研究以外の他分野の研究にも利用できる可能性があり、他分野の専門家から異なる視点の活用方策が提案される可能性がある。

今後の進め方

これまでにイベントなどで実施してきた活動を今後も継続します。今回提案させていただいた視点に基づいて、深度100m毎に設置される予備ステージの活用などの具体的な活用方策を策定し、活動を進めてまいります。これらの活動については、委員会に報告し、ご意見などをいただきながらより良い研究施設の活用が行えるよう努めてまいります。

これまでにイベントなどで実施してきた活動

地層・断層見学ツアー



掘削土に含まれる化石を利用した体験学習



県内高校生を対象とした地層に関する講座



委員会でいただいたご意見

地層に関する講座の開催については、対象を高校生だけに限定するのではなく、小・中学生の中にも地層などに興味をもっている児童・生徒がいるため、今後は対象を広げることの検討も必要。

“施設活用を進めるにあたっての視点”で提案があるように、“活かした素材の活用”は重要な視点。今後も本物を見せることを基本として、体験学習の場としての施設活用を進めてほしい。

来年は最初の予備ステージが使えるようになるので、予備ステージを活用した具体的なアイデアを提案していただきたい。

跡利用検討委員会というのは、研究が終了した後の施設の活用方法を考えることが大事なことであるが、研究が終了するまでにはかなりの時間がある。それまでの間、予備ステージなどが出来たときの活用方法を提案いただき、実際に研究所をご見学いただくことで、超深地層研究所計画の理解を深めることに繋げてもらいたい。